

2026年3月8日 第二礼拝

説教題『愛の神と共に歩む信仰』マルコによる福音書12章18～27節

主任牧師 加藤 誠

**「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。あなたがたは大変な思い違いをしている」(マルコ福音書12章27節)**

受難節に入って三回目の主日。今日からはマルコ福音書に沿って、十字架に向かわれた主イエスの闘いと祈りを学んでいきたいと思えます。

今朝の場面は、サドカイ派の人々が主イエスに復活に関する問答を挑んだところ、逆に主イエスから彼らの「大変な思い違い」を鋭く指摘された場面です。サドカイとはダビデ王に仕えた祭司ザドクの子孫たちを意味する言葉で、「大祭司とその仲間たち」という意味です。当時のファリサイ派が、信仰の理想を求めて旧約の律法を日常生活でもしっかりと守ることを追求した「理想主義」の人たちだったのに対し、サドカイ派はエルサレム神殿の実権を握る祭司たちと、最高議会の実権を握る貴族たちのグループで、「現実主義」の人たちでした。つまり、律法にふさわしい「あるべき姿」を追及するような青っばいことはしない。信仰とは儀式を守ればよい。ローマの支配という現実の中で、エルサレム神殿の祭儀が守られて、自分たちの権益が守られれば、それで良いという人たちです。実際、エルサレム神殿には多額の献金収入があり、その金でローマの支配者に媚びを売りつつ、自分たちの宗教的権力と政治的権力を守ってもらう取引をしていたのです。その彼らにとって、エルサレム神殿を厳しく批判するイエスは目ざわりで排除すべき存在であり、彼らは復活についていちゃもんをつけ、その足を引っ張ろうと近づいてきたものの、逆に主イエスから「あなたたちは大変な思い違いをしている！」と、厳しい指摘を受けたのでした。

主イエスがここで鋭く指摘したサドカイ派の信仰の問題点は二つあります。

一つは「彼らの信仰が聖書も神の力も知らない信仰である」という点です。つまり「あなたたちは聖書を生きていないし、神の力を生きていない」ということ。主イエスにとって信仰とは神との生きた対話であり、神不在に見えるこの世界を愛の神と共に生きていく力でした。信仰とは「人はなぜ生きるのか」「人は何をして、どこに向かって生きるのか」という人生の根本にかかわる問いと格闘することです。聖書を開き、今生きて語り掛けられている神と対話していく。その対話を通して、日々古い自分に死に、新しい自分に造りかえられていく。それが生きた信仰です。例えば主イエスは荒野でサタンから誘惑を受けます。「お前に与えられているメシアの特別な力を自分の腹を満たすために使い、奇跡を起こして人々の賞賛を受けてヒーローになるために使ったらいい。わたしにひれ伏せ。そうすればこの世界を支配する力と金を手にできるぞ！」と。それに対して主イエスは「人は神に口から出る一つ一つの言葉で

生きる」、つまり「わたしは生きておられる神と日々対話しながら、神の命と力をいただきながら生きる！」と応えてサタンの誘惑を退けました。一方で、サドカイ派にとって神は、彼らの権力・権益を守る道具でしかありません。彼らは自分たちの頭の理屈の中だけで神を考えて、「こういう矛盾があるから復活などあるわけがない」と、神の力を自分たちの小さな頭の中に閉じ込めてしまっている。そこには生ける神との格闘、対話がない。礼拝はささげていても死んだ信仰。だから「あなたたちは聖書も神の力も知らない」と厳しく指摘されたのでした。

もう一つは、サドカイ派の人々がモーセの召命の箇所の意味を正しく理解できていないという厳しい指摘です。出エジプト記3章の「燃える柴」として有名な個所で、主なる神がモーセに語り掛け、彼を御自分の働きのために召し出した箇所ですが、あの場面で神は御自分のことを「わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」と自己紹介している。そこにどういう意味があったのでしょうか。あの時、モーセは自分がイスラエル人であることを捨て、神から逃げて隠れるように生きていました。そのモーセに「わたしはあなたのルーツの神である。あなたの存在の根源に関わり、今日あなたが生きる根拠である神である！」と語り掛けたということです。

同時にこの自己紹介は、モーセを神の召命に導き出す言葉とセットだった点が重要です。「わたしはエジプトのイスラエルの民の叫びを聞いた。彼らのもとに戻り、彼らを救い出すわたしの働きを担ってほしい!」。つまり、神に背を向けて「神など忘れて生きよう」としていたモーセを神のもとに連れ戻し、新しい人として生き直させていく。いわばモーセに起こった「復活」事件です。荒れ野に隠れて死んでいたモーセを、神は「わたしと一緒に生きよう。エジプトに戻れ!」と言って、モーセを新しい命の召命に起こしていった。そういう「復活」が起こされた出来事だったのです。

ところがサドカイ派の人たちは、そういう神の復活の力と出会おうとしない。自分たちの理屈、自分たちの権益の中に神を閉じ込めてしまっている。神殿の儀式をしていけば信仰しているかのように満足している。大変な思い違いの、見せかけの信仰。いわば「死んだ者の神の信仰」という彼らの大きな問題をここで指摘されたのでした。

神は生きておられる方。そして今日も私たちに生きて語り掛け、御自分の使命に私たちに招いておられる方。私たちはどこか「自分の暮らしが安全で守られていたらそれでいい」と、神に背を向け、神から身を隠して「死んだ者の神の信仰」に陥っていませんか。神はその私たちに御自身の御言葉のもとに連れ戻し、今日も「この世界を、わたしと共に生きていこう」と招かれる方です。主イエスは、この神との生きた対話の中で、神の復活の力に日々あずかりながら、十字架に向かう力を受けていかれました。私たちもまた、サドカイ派のような「死んだ者の神の信仰」ではなく、主イエスが生きられた「生きている者の神の信仰」に生かされていきたいのです。